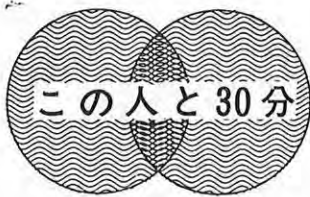


熊本の水は宝物

日本画家 堅山南風



このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

熊本出身の日本画家、堅山南風さんを東京都世田谷区瀬田四一四〇—一〇の自宅に訪れたとき、初夏の陽が輝やき森の緑が美しい日であった。日本画家の住まいらしく、ひっそりと静かで、ときどき名も知らぬ小鳥の音が聞かれた。



用件を伝えると、南風さんは、熊本市立町の頃の少年時代の思い出から、志を建てて今日に至るまでの長い道程について語ってくれた。お話を聞いていると、さすが日本画壇の重鎮らしく、言葉のはしはしに「信念」と「哲学」と「教訓」がそれとなくにじみ出て、深い感銘を与えてくれた。そして最後に南風さんは「私が言いたいのは正しくせよということなんです。心を正しくしなければ駄目なんです」と語った。「熊本の水は宝物」とも言った。私たちが家を辞するとき、玄関まで見送り、手を振ってくれた南風さんであった。文化功労者、芸術院会員、文化勲章受賞者、熊本名誉市民。明治二十九年生れ、八十五歳。

本名 堅山久雅二

熊本の思い出

幼ない少年時代のことが最もなつかしいですね。特に十二、三歳の頃が楽しかったです。それから商売がうまくいかなくなり、家運が傾きだし、今思い出しますと悲しくなります。心が暗くなるので、特に十六、七の時は、いよいよいけなかったですね。ただ悲観だけがありました。

母は私が生まれてすぐなくなり、父は四歳の時になくなりました。

兄は商売に向かず右往左往するばかりでした。日露戦争が勃発するといよいよダメになり、夜逃げ同様に家を出ました。

そういう訳で、自分は何か家のために働かねばならない、そうかと言って商売には向きません。それで新聞配達をやった訳です。

家運はいよいよ窮迫するばかりですが絵かきになる決心はかわりませんでした。私の長兄は多少の文才と絵を描くのが上手でした。それで私も長兄に影響されて絵筆を弄ぶことになりました。恰度その時分この長兄の友人で池辺正人という人がありましたがこの人が画家志望の人で絵を上手に描きました、その上スパライスイ水泳の達人でしたので私は魅了され、絵と水泳と二つながら手ほどきを受けました。時に増水した白川の濁流に泳ぎ為に耳の中に泥水がはいり度々耳だけ

をおこしました。私が画家となる因果関係です。そんな状態の内、家運は窮迫し時局は凶悪になり日露開戦となりました。

看護員応募

戦時中は病院の看護員に応募しました。それは子供にとっては重労働で耐えられませんでした。ちょうどその時、日本赤十字社熊本支部ができて、その看護班の小使の募集がありましたので、そこで小使の務めをしたのです。月給は七円くれました。

長兄は一向に家のことについては役に立たず、次兄は家を支えていたが兵隊に取られ、戦争に行ったのです。弟は私よりは三つ年下で何にもできず、そういう訳で、私が七円の月給で家を支えてきたのです。

画家を志望

言わば赤貧洗うがごとしで、今に見ろ、何かになってやると考えておりました。目的は絵描きになることでした。そうですね、絵描きになろうとはっきり決心したのは高等小学校二年の時でした。その修業方法としてどうしたらよいかと考えてみますと、まあこれは先生にかなければ自分で、絵の具の溶かしみちも分らない。なかなかいい先生にみつこうと思っても、誰がいい先生か分らない。どういう手廻でもって先生のところへ行

ってよいかわからないような状態でしたが前記池辺氏より幾分かの啓発を受けたのでした。

ある日私が看護班の勤めの余暇さえあれば紙に何かを書いておりました。するとその看護班長の木庭泰三という医者(少佐相当官)が、「お前はなかなか絵を器用に描くな、絵描きになりたい志望があるのか。」と聞いたので、「もちろん私は絵描きになりたい、こんなことで終ってしまおうとは思いません、絵描きになります。」と答えました。

「そうかそんならしっかりやれ、この仕事は一生懸命にやっつて、そうして暇な時はいつでも絵を描いてよろしい。」というお許しがでたのです。

饒別に三十円

そういうことで、自分の務めのほかは紙さえあれば、筆さえあればということに絵を描いておりました。戦争は一年で終わりましたので、看護班も一年で解散になりました。

その時、お前は実によくやっつてくれた、感心だと、それからみんな金を集めて、お前にプレゼントするということになって、三十人の看護婦と二人の婦長とお医者さん二人などみんなで三十六、七人くらいの人達がお金を合せて私に三十円くれました。その時分の三十円というのは今にすれば大した金ですよ。そこで木庭先生が曰く、「お前は東京

へ行って師事したい意志がありそうだが、これをその学費にせよ。ほかのことに使わないよ。」と言われたですね。

「ありがたいことです、絶対に使いません、私が東京へ行く時の学費にします。」と言っておったのです。

けれども兄が明治三十八年十二月三十日頃に凱旋しますと、着物も何にもないありさまなのです。それでまあ、兄に着せる着物から買わなくちゃならないでしょう、そういう訳で着物を買いました。それからお正月だからせめて餅ぐらいつきたいということで、餅をつく。要するに三十円なんてすぐになくなってしまいましたよ。

お寺に仮寓

私共が家を出て行き処もないし、つもの如その当時西子飼に浄土宗のお寺で憚空寺というお寺があるのですが、その和尚さんと古くから懇意にしていたので、その方が、「お前さんのそういう事情はよく分っている、行くところがなければ私のところへ来なさい、私のところの書院が空いているので、そこを使っていから、ただおいてあげるから。」と申し出てくれましたので、「それはありがたいことです、それじゃお願いします。」と憚空寺にころがりこんだわけなんです。日露戦争終局後までどんなに助かったかしれません。それで一応ホツとしたのです。という

のは毎日借金の催足で責められることがなくなりました。看護班の勤めが終わってその後一年ばかりは何か職を捜しました。

憚空寺の住職はその後平塚真道和尚に代わりましたが、この真道和尚がまことにいい人で厄介者の私共を厚遇してくれ、実に親密に交際致しました。この真道和尚の事が忘れられません。

小さな新聞社

家庭新聞と九州教育雑誌と両方やっている新聞社があったですね。その主幹の伊津野満仁太という先生を、私は前から知っておったのですが、その伊津野先生に私を何とか使ってくれませんかと言いましたら、「そうだね、丁度一人欲しいと思っていたところだ、しかし月給は安いぞ、それでもよければ。」ということとで、「月給なんかいくらでもいいですから使ってください。」ということとで、この事務員になりました。私は東京へ行くようになるまで、そこで務めたのです。二十歳の時熊本に居る四条派の画家福島峯雲先生に師事しました、東京に出るまで福島先生に習いました。

いよいよ上京

恰度私が二十三歳の時でしたかね、加藤清正公の三百年祭というのがあるというので、山中神風君という熊本出身の輩がすでに私より三年前に東京へ行って梶